

「戦後日本の遺伝学とルイセンコ論争—木原均を中心に—」

飯田香穂里（総合研究大学院大学）

戦後日本の遺伝学史の中でも特に重要と思われる三つの要素--（１）ルイセンコ「論争」の形成過程、（２）遺伝学の学術レベルの歴史（intellectual history）、（３）研究所の設立過程（institutional history）--に注目し、これらの要素が占領下の日本における政治的な背景の中でどのように交錯したのかについて議論する。

ソ連の育種家である T.D.ルイセンコは、環境が遺伝を完全に支配し、遺伝子も染色体も存在しないと主張した。さらに、自説とは相容れない「メンデル・モルガン派」（遺伝子や染色体を扱う遺伝学の総称）の研究を政治的に弾圧していった。このような動きに対し、戦後、特にアメリカでは強烈的な批判が繰り返されたが、日本では、1950年代初頭までそのような批判はほとんどみられなかった。このような日本におけるルイセンコ説への反応のあり方は米占領軍にとって懸念材料でしかなく、敗戦直後から日本の遺伝学者が計画申請していた国立遺伝学研究所の設立にもなかなか許可をおろさなかった。

ところが、1950年代に入ってから、日本におけるルイセンコに関する議論はだんだんと「親ルイセンコ派」と「反ルイセンコ派」とが対立する二極の様相を呈する。この議論構造の変化の過程を、当時の日本の代表的な遺伝学者である木原均を中心に、生物学と政治的背景の双方から分析することを試みる。